
コペルニクスの転回

上原賢司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コペルニクスの転回

【Nコード】

N4416Q

【作者名】

上原賢司

【あらすじ】

僕は死のうと思った。

というのも、ここ最近いやなことがつづいたからである。

彼女に振られ、勤務先はつぶれ、財布も盗まれた。

何をしても暗い気分を追い払えず、もう解放されたいと願う。

僕は死に場所を探して、京都を彷徨うのである。

例えば、フランス革命。または、フン族の侵入。さらにいえば、りんごが落ちたとき。

世の中には少なからず変化があるが、大事なのは日々変わりゆくことではなく、きっかけを逃さないことである。

僕はもう死のうと思った。

そりゃ、心残りが無いと言えようそになる。でもここ最近いやなことが続いたせいで、すっかり落ちこんでしまったのだ。

四年間付き合って結婚する気でいた彼女に振られた。ポケットから婚約指輪を出そうとした瞬間のことである。理由はほかに付き合っている人がいるからだそうだ。

またその二日後、僕の勤めるデザイナー事務所がつぶれた。優秀な人間は再就職を果たしたが、僕はたいした実績がなかったのので、どこからもスカウトは来なかった。そしてそのまま現在に至る。

それから三日たった今日、正確に言うとも一月十三日午後十二時十二分四十八秒、僕の財布が盗まれた。そこには僕の貴重な財産が入っていた。倒産と同時に給料が支払われたので、銀行で全額おろし、最後の贅沢のつもりで寿司を食い、店から出た直後のことである。手が滑って財布を道に落としてしまった。それを拾おうとしたが、瞬間、金髪の少年が財布を拾って猛スピードで走っていった。もちろん追いかけたが、僕ではとても追いつくことはできなかった。

だが、これらの事件は基本的に僕のせいではない。僕がスーパーマンならどれも防げたはずだが、もちろんそんなはずはないし、そもその原因は全て周りにあるのだ。彼女と職と財布の三つを同時に失うなんて、そんな理不尽なことはない。

中国の覇王、項羽ならばきっとこう言うだろう、天が我を滅ぼそうとしているのだ、と。

だから僕は死ぬことにした。

時計の針は一時ちょうど。実に四十分近くこの公園のベンチで放心状態にあったようだ。僕は木枯らし吹き荒ぶこの公園を出て、死に場所を探すことにした。

すぐそこには四条通りがある。京都の地理に詳しい人ならすぐ分かるだろう、そうこの公園とは円山公園である。京都通ではない人のために説明すると、四条通りとは京都市内を東西に走る大通りだ。北には三条通り、南には五条通りがある。そして円山公園は四条通りの東端にあり、八幡神社とくっついている。

僕はどうせ死ぬなら、華々しく散ろうと考え、かの有名な慣用句「清水の舞台から飛び降りる」を実行しようと思った。清水寺はここから南、五条通りの東端にある。隣に大谷祖廟という巨大な墓場があるのでちょうどいい。

東大路通りは交通量がすごく多い。すぐ右を乗用車がぐんぐん通る。しかし、歩道があまりにも狭い。ほんの三メートルもないんじゃないだろうか、というのもバスが横を通るときなかなかかなり近いからだ。たぶん自転車では通れないだろう。こんなところで死んだらまるで意味がないので、僕はいつもより注意を払って歩道の隅を歩くことにする。

僕の視界には常に彼女の姿がある。僕はできるだけ見ないようにして彼女を無視しようとしたが、どうにもうまくいかない。

彼女は白のワンピースがよく似合う人で美しかった。今になっても思うと、外見的にも内面的にも僕なんかとつりあう人間ではなかった。それにしても二股をかけるなんてひどいと思う。それでもまだ未練があるし、それを断ち切れないまま死ぬのはいやだ。清水の舞台に立ったら、そんなことどうでもよくなるのかな。

十分ほど歩いたころだろうか、正面に五条通りを見つけた。このころにはすでに額に汗をかいていた。交差点を東、つまり左に曲がる。そして、坂を登り、人並みを掻き分け、三年坂を望んだ。ここ

を登ればいよいよ清水寺だ。そう思うと冷や汗がでる。僕はこれから死ぬのだ。

参道には若いカップルが多い。中には和服を着ている女性もいる。昔、僕達もこの三年坂を登った。たしかそのとき、僕は三年坂について話しをした。彼女はその話を聞いて、顔をくしゃつとして笑っていた記憶がある。

三年坂には、その坂で転んだら三年後に死ぬという伝説があるらしい。ある男は三年に一回転びに行ったため、非常に長生きが出来たという。友人の受け売りだったが、彼女はとても喜んでいた。

しかし、今では僕は一人だ。もはや空を見上げる余裕などなく、ただ悲しかった。もしかしたら、あの笑いも作り笑いだったのかもしれない。

僕が泣きそうになりながら登っていると、参道に並ぶお店の店員からお茶を渡された。まあ、みんなに配っていたのだけど、何も僕に渡さなくてもいいと思う。でもこれが最後のお茶になるかもしれないので、お礼を言ってありがたくもらった。

透明のカップに入っていて、透き通った濃い緑色がとてもきれいだ。そつと一口飲んでみると、人肌程度の温度で飲みやすい。苦味の中にかすかな甘みが紛れていて、ちょうどいいバランスだ。一気に飲んでしまうのは惜しいので、もう一口飲んだらあとは残し、後で飲むことにする。

僕の額から汗が垂れる。袖で顔を拭く。そして、階段を登り、ようやく塔に着いた。清水の舞台はもうすぐそこである。残りのお茶を眺め、一気に飲み干した。喉を通るお茶の香りが美しい。

いよいよである。

券を買って中に入る。木の香りがする。右を向くと京都の街を一望できた。昼過ぎでこの天候だというのに遠くには靄がかかっていてよく見えない。舞台の上では、観光客が写真を取っていて、楽しそうな声をする。

そういえば僕らもここで写真を撮った。なんだか全てが夢のよう

である。あのころに戻りたい。心の底からそう思う。

気がついたとき、僕は泣いていた。だが僕は涙を拭き、決意を固める。

一歩一歩ゆっくりと進み、丸太の柵のところまで来た。下を見る。高い。体が震える。やるしかない。足に力を入れ、柵をまたごうとする。しかし足が動かない。何をしているんだ、今だ、そら、悲しいことから逃げるんだ。

駄目だった。

あまりの高さに身がすくんでしまったのである。僕は結局足を動かすことすら出来ないのか。

しかし、こうなっては仕方がない。僕は清水の舞台から飛び降り自殺をすることはあきらめた。

とりあえずここから出よう、そう思って観光客を避けて奥に行き、道を下った。そこには滝があり、その水を飲むとなにやらい効果があるらしい。そこにもやはり人が沢山いて自由にはとても歩けそうではない。だからかなり強引に人と人の間を通過して、三年坂まで駆けた。

三年坂のところで何気なく空を見上げる。さっきまでは真っ青な空だったのが、今はで端っこに灰色の雲が現れていて、いずれ雨が降るだろうことがわかる。

これは急がなければならぬ。観光客を押しつけて三年坂を下る。だが、清水寺での自殺を断念した今では、他のいい方法が思い浮かばず、どこに向かえばいいのかわからない。もうそれすら見失ってしまったようだ。

それなら、別に自殺なんてしなくても良いじゃないかと言う人がいるかもしれないが、僕には義務があるのだ。

悲しい気持ちの波から僕を救ってやらなければならぬ。

だからとりあえず、東大路通りの一本西の通りである川端通りまで出ようと思った。そこに行くと、華やかで楽な死に方の一つや二つくらいなら見つかるかもしれない。

そういうわけで僕は五条通を西へと歩くことにした。

五条通はとても大きな通りである。三条通りや四条通りと並ぶほどだ。東から西へゆるい下り坂となっていて、僕はそこをとぼとぼと歩いていった。

東大路通りから川端通りまでは、徒歩だと十分くらいだろうか、結構時間がかかる。

右手に個人商店が立ち並び、僕は歩きながらそれらを見る。金物屋など伝統がありそうな古い店が多い。

そこで僕は窓に張ってある黄ばんだポスターを見て、立ち止まってしまった。鉢巻を締めた男の横顔を中心にすえて、何人もの人が暗闇で和太鼓を叩いている構図だ。今見ても筆の荒々しいタッチが冴えているように思える。

このポスターは、四年前にまだ新人だった僕が作ったものである。確かこれが僕の最初の作品だった。

デザイン事務所に入ったもののほとんど雑用ばかりで、絵を描かせてもらえなかったとき、僕は空き時間を利用してこれを描いた。

そしてこのポスターを納品してはどうかと上司に進言してみたのだ。確か神社のお祭りのポスターだったろうか。上司は驚いた顔をしていて、これは採用された。あのころの僕は才能があったし、やる気もあった。しかし、それも年とともに磨り減り、気づいたときにはすでに目に見えないほど小さなものになっていたのである。

そういえば彼女と付き合い始めたのもこのころだ。きっと、今の僕にはない輝きがあったのだろう。

僕はひどく惨めな気持ちになった。昔の作品の良さが辛いのだ。最初から駄目だったら諦めもつくだろうが、以前に出来たことが出来なくなることほど悲しいものはない。

あの頃の僕が堕落せず、才能をすり減らさず、まじめに精進していたらどんなによかったことだろう。そうすれば再就職できたかも

しれないし、彼女を失わなくて済んだかもしれないのだ。

僕は何もかも面倒になり、早く解放されたいと願う。

そこからはもう夢中で走った。ひんやりとした空気を顔に受け、視線は遠くの五条大橋。白い息が頬に沿って流れる。遠くにあった交差点が、もう、すぐそこまで来た。

道路を挟んだ反対側の歩道にマクドナルドが見える。昔はよく行ったが、これからはもう行くことはない。僕は疲労のせいで川端通りまで行けず足を止め、冷えた耳を両手で暖めた。

川端通りも、やはり交通量が多い。いつそのこと道路に飛び込ん で車にはねられてやろうかと思う。しかし、そんな死に方は他人に迷惑をかけるだけで、美しくもなんともない。僕はただ死ぬのではなく、悲しみを打ち消すような華のある死に方がいいのだ。

例えば、信長のように炎の中で舞って死ぬ。そのような美しさが伴ってこそ、僕は悲しみから目をそらせるのである。

僕は川端通りの横断歩道を渡って、五条大橋の中心に立った。ここで少し案を練ろうと思ったのだ。

そこでしばらくの間考えた結果、とりあえず三条大橋に行くことにする。賑やかなほうが色んなアイデアが出るだろう。

僕は鴨川の東の側を一步一步努めて大きく、はきはきと歩く。並木がさわさわと揺れ、その音は波の行き来にも似ていた。そのため、目を瞑ると海岸を歩いているかのようだ。

しばらく歩いた頃、のどが渴いて、何か飲み物がほしくなった。このあたりに自動販売機でもないかしら、と思って見回したが、このあたりにはないようだ。まあ、そのうちあるだろう。

僕は気づいた。もう財布はないのだ。たった百二十円のものすら買えない。これでは今の僕は経済力において赤ん坊と大差がないではないか。

しかし、僕がもっとも腹が立ったのは、経済力の有無に対してではない。僕の間抜けさに対してなのだ。注意力緩慢、集中力の欠如、

記憶能力の弱体、これらのせいで僕の財布は持ち去られてしまったのだ。どこかの誰かにである。いや、そればかりではない。彼女のこと仕事のこと、原因の根っこにはこれがあるのだ。

僕はもうつくづく嫌になる。自分の足りないところをこうもありありと示してくれる神が憎い。いや、それとも神は私に奮起を促しているのだろうか。しかし、過去の僕ならともかく、今の僕はただの搾りかすなんだ。

悲しい。ただ悲しい。

僕は無我夢中で足を急いだ。

三条大橋は多くの人で賑わっている。似顔絵描きもいれば、雑誌を売っているホームレスもいて、実に活気に満ちている。

僕は三条大橋の中心に立って下を覗く。どことなく焦点が合わない。

今日の鴨川は水位が低い。その水が流れる様は、まるで山奥で湧いた水が緑の斜面をちんちろと滑っていくようだ。水面には太陽が映って光り、その上を鳥たちが歩いている。寒いせいか、さすがに川辺に座っているカップルはいなくて、そこだけは妙に落ち着いた雰囲気だ。

僕はどうしたものか何気なく足元に目を移す。すると靴の踵の部分で千円札を踏んでいるではないか。だがこれから死ぬ僕には必要ではない、と思った。しかし、僕はその時ひらめいたのだ。

そうだ、これで強い酒でも買い、一気に飲んで死ぬのはどうだろう。それなら太陽の下で美しく、かつ楽に死ぬるかもしれない。しかも、今日は川辺に人が少ないから、僕の自殺は止められない。きっと最初に死体を発見した人は度肝を抜くだろう。

そう思った僕は早速コンビニに行って焼酎を買った。

そして、足を軽く折り曲げ寝転び、瓶に口につけて酒を含む。思ったより温かく、ぬるい。だがこの寒さの中では、それぐらいでちようどいいのである。

普段からそれほどお酒を飲まない僕は、口に含んだ分を飲み込んだ瞬間、あまりの強さにむせてしまった。喉が焼けるように熱く、皮膚がただれてしまいそうである。だが、それくらいの酒でないと、とてもじゃないが中毒死なんてできっこない。

またもう一口飲む。と同時に周りの景色が少し回転したのを感じ、これなら確実に死ねると思った。

そして、瓶を持ち上げて一気に飲んだ。臭いがきつく、のどが痛い。

その結果、僕は一升瓶の半分を一気に飲んでしまった。これで待っていれば自然に終わるだろう。

アルコールが回って意識がなくなるまで、寝転んだまま空でも見ていようと思った。

空は青く透明で、まるでガラス細工のようだ。視界を横切る三条大橋から何人かが僕を見ている人がいるが、無理もない。しかし、よく見ると、北のほうに黒い雲が少しある。まあ、いいだろう。もう気を失うわけだから、それまで持てばどうなったっていい。

僕の世界は急に回りだした。一点にうまく焦点を合わせられない。頭の内側からドクドクと血管が鳴る音がして痛く、猛烈な吐き気が来た。

そして僕は目を閉じる。

僕は雨に濡らされて目を覚ました。空は一面灰色の雲に覆われ、僕が転んでいたすぐ隣まで川は広がっている。

ところで僕はなぜ生きているのだろう。その答えはすぐ近くにあった。というよりいた。

さつき三条大橋のところで雑誌を売っていたホームレス、どうやら彼が僕を助けてくれたらしい。僕の周りには救急隊員の人たちも沢山いて、僕を担架に乗せるべく準備をしている。

ホームレスの彼が言うには、僕が寝ている（実際は意識がなくなっただけ）のを三条大橋からなんとはなしに見ていたらしい。そして僕

が寝てしばらくすると、雨が降ってきたのだという。彼自身は屋根のあるところに移動していたが、僕は相変わらず寝転んだままだったので変に思い、雨に濡れながら近づく和一升瓶が置いてあった。しかも僕は酒臭く、意識がない。これはもしかして急性アルコール中毒なのではと考え、体温が下がらないようにとりあえず上着をかけた。そして、救急車を呼びに行ったのだという。

僕は救急車で運ばれるとき、隊員の人から言われた。

「あなたねえ、今回はただ泥酔して眠っただけみたいですけどね。もう少し飲んでいたら、血中アルコール濃度が上がりすぎて死んでいたんですよ」

僕は病院では結局説教をされただけだった。

そして、僕は病院を出る。

空はすでに傾きかけた陽の光で赤く染まり、さっきまでの灰色雲ももうどこかへ行ってしまった。

僕の頭は猛烈に痛む。歩くたび、見るたび、考えるたびに血管が破裂しそうである。

僕は正面の噴水のある広場に、ベンチが見えたのでとりあえずそこまで行って座る。

なぜだろう、僕は自殺しようとした理由が思い出せない。だけど、心の隅の埃を見つけるために足りない頭を振り絞るべきだと自然に思う。

まず、財布はない。そのせいで診療代を支払えなかった。なぜないんだろう。わからない。思い出せないのだ。それではいつまではあったのだろうか。今日のお昼のときにはどうだった。いや、あの時はあった。僕は確かにすしを食べた。ということは食後か。

そうだ思い出した。僕の財布は盗まれたのだった。

そう、確かあれは僕の全財産だ。僕の再就職が決まるまで、失業手当とあれで何とかやっていくつもりだったのだ。もう頼れる人もなく、物もなくなり、僕はあのとき全てを失った。

僕は自殺しようとした理由を見つけた。孤独が悲しかったのである。人から疎外され、社会から排除され、僕ですら僕を信用してあげられなかった。きっと僕は自分をこれ以上悲しませたくないかったのだろう。

と僕が考えたとき、急にあの強烈な吐き気が腹の中に湧いた。

そのあまりの強さに思わず涙が出る。苦しい。出るなら早く出ろ。僕はわずかに上を見上げたまま、ベンチから一步も動けずにいる。頭が真っ白になり、次の瞬間、ついに僕は嘔吐した。

それらは特有の苦味を伴って、口から飛び出した。かなりの勢いでかなりの量が出る。僕は刹那にパンドラの箱の話を思い出した。これらが全て出てしまった後、僕の心はすっきりときれいになっていた。寂しさも悲しさもはや過去のものである。

オレンジ色の空が美しい。もう自殺なんかする気はない。何もかもが吹っ切れた。僕は気づいたのだ。人生とは楽しむことだけではない。悲しみを許容すること、それもまた人生であると。

そうだ、家へ帰ろう。たとえ、彼女も職も金もなくても、僕にはまだ帰るべきところが残っているのだ。

僕はすくつと立ち上がり、吐瀉物の海を越え、家へ向かって歩き出した。今の僕の体はさっきまでより幾分か軽い。

世間の言うように楽しんで生きること、それは確かにすばらしい。だが、悲しみを認め許すこと、僕はそこに真理を見出した。

ニュートンにとってはりんごが転換点だったように、嘔吐が僕にとっての転換点だったようだ。

人の短い一生の中で、僕はコペルニクスの転回を発見した。

(後書き)

厳しい感想をお待ちしております。
辛ければ辛いほどありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4416q/>

コペルニクスの転回

2011年1月27日01時40分発行